

「岩見沢の航空写真(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

岩見沢は函館本線と室蘭本線の合流点に位置し、機関車の整備に加え、多くの炭鉱からの石炭の集積地として発展してきた。当時の航空写真にはその繁栄ぶりが残されている。



これは 1948 年(昭和 23 年)の函館本線(上方の左右の線路)と、室蘭本線(左下に斜めに弧を描く線路)の分岐点付近である。「分岐点」といっても、多くの側線があり、しかも長大である。室蘭方の炭鉱から集まった長大な編成の石炭列車が、岩見沢駅構内に入る前の待機線にちがいない。



これは昭和末期の岩見沢機関区の様子である。すでに蒸気機関車は廃止され、貨物列車の姿もまばらである。何本かの線路は撤去されているのもわかる。しかし、機関庫の脇には、丸い「転車台」が残っている。

私がもう一つ興味を持ったのは、岩見沢駅と幾春別川に挟まれた地域の、農耕地の地割である。例外なく「短冊形」の長細い地割になっている。三富新田(さんとめしんでん)などの武蔵野の新田集落にも似ているが、これはどのようにして形成されたのだろうか?



当時の地元出身の方に直接聞いてみると、これは「馬力農耕」の産物だという。馬は小回りが利かないので、このように長細い耕作地のほうが、効率的に作業ができたのだそうだ。また、当時は「さんか衆」と呼ばれる労働集団が存在したという。定住地を持たない複数の家族単位の集団で、農作業の手伝いの為に、道内や本土を回っていたらしい。各農家にとってその労働力は重要で、専用の宿泊納屋も用意されていた。



「さんか衆」は、漢字では「三架衆」と書くという説もある。「三架」とは、野外での自炊時に鍋をぶら下げた、3本の金属棒のことである。「三架」はイタリア映画「道」で見ることができる。ザンパノ(旅芸人)とジェルソミーナ(貧しい母から1万リラで買われた娘)が野外で自炊する時、必ず金属製の三架を使っている。当時の三架衆もこのような炊事道具を持って、北海道を旅していたのかも知れない。